

# 本校における教育相談の取組

## ～サマースクールについて～

福岡県立福岡視覚特別支援学校 教諭 末成 智子

### 1 はじめに

本校の教育相談では、①個別の教育相談（月1回まで）、②乳幼児教室「さくらんぼ教室」（月1回）、③サマースクール（夏季休業中に1回）を実施している。教育相談利用者は0歳～中学3年生までで、昨年度は33名が利用した。33名の利用頻度は、毎月利用している人、学期ごと、長期休業のみ、一回のみなど、様々である。

本校のサマースクールでは、学期中は個別に来校している児童生徒が夏季休業中に集まり、小集団で見え方に配慮した運動や学習に取り組む活動を行ってきた。児童生徒同士、保護者同士、担任同士の出会いの場として、一年に一度のこの活動を楽しみにしている児童生徒もいる。

しかしながら、令和2年度からはコロナ禍の影響で集うことが難しい状況となった。令和3年度、4年度は来校人数を制限して対面で実施することを計画したが、感染者数の急増によって対面での実施はできなくなった。楽しみにしてくれている児童生徒もいることから、中止ではなく、オンラインでの実施を試みた。

本発表では、コロナ禍前のサマースクールである令和元年度の実践と、コロナ禍のためオンラインで実施したサマースクールについて実施内容やアンケート結果を整理して検討し、サマースクールの意義と今後の在り方について報告する。

### 2 実践の概要

#### (1) サマースクールの意義

「すべての視覚障害児の学びを支える視覚障がい教育の在り方に関する提言」（平成22年11月15日）では、小・中学校で学ぶ視覚障がい児についても、「視覚に依存しない学習活動を通じて、視覚障害児自身が視覚に依存しない学習の方法を身につけること」「視覚障害児どうしの共感を通して感覚を磨く場」「同じ障害のある友達と心を許して話し合える環境」<sup>1)</sup>が必要であると述べられている。ただしそれは小中学校での生活のみでは確保することが難しい。

このことを踏まえ、本校では、視覚特別支援学校のセンター的機能を果たすため、以下の内容を重視しながら、サマースクールに取り組んできた。

- ア 参加児童生徒が、小集団の活動の中で、見やすく配慮された環境や、視覚だけに依存しない学習活動を体験することで、主体的に活動でき、満足感を得られるようにすること。
- イ 子ども同士が自然に交流できるようにすること。見えにくさを有し、補助具を使用したリ、支援を受けたりしながら、小中学校で学ぶ仲間が自分以外にもいることを知ること。
- ウ 保護者同士の意見交換や情報交換の場を設定すること。
- エ 視覚障がい有する児童生徒を担当する小中学校の教員の意見交換や情報交換の場を設定すること。
- オ 全学部の職員が携わることで、センター的機能を担う一員としての意識を促進すること。

## (2) 令和元年度（コロナ禍前）のサマースクール

### ア 参加者

令和元年度のサマースクールは、小学2年生2名、3年生1名、4年生1名、5年生1名、6年生1名、中学1年生4名の計10名が参加した。（うち1名新規、3名は1年以上教育相談を利用していなかった）。それぞれの保護者と4名の担任の参加。

### イ 職員の運営体制

当日の活動ごと（コーナー）のリーダーを支援課の職員が担当し、全職員でコーナーの係を分担した。6月下旬から係打ち合わせを開始し、コーナーごとに内容を考え、準備を進めた。参加者が決まってからは、普段教育相談を担当している支援課が、参加者の実態表を作成し、見え方や必要な配慮事項などの実態を伝え、支援の方法についての検討に生かした。

### ウ 当日の活動内容

表1は、令和元年度のサマースクールの日程である。活動は、低学年中心のAグループ（4名）、高学年・中学生が中心のBグループ（6名）に分けて実施した。児童生徒の活動は、運動と工作・理科実験の2つのプログラムを実施した。これまでの経験から、体を動かす活動を先にした方が児童生徒同士が打ち解ける様子が見られたため、運動の活動を1時間目に設定した。

午後は、児童生徒はそれぞれの学校の宿題に取り組み、並行して、保護者の情報交換会と、担任の情報交換会を実施した。

表1：令和元年度サマースクール日程

時間	内容	
	Aグループ（低学年）	Bグループ（高学年・中学生）
10:00	はじめの会	
10:15	運動・ボウリング	運動：サウンドテーブルテニス
11:15	工作 糸電話、バネ電話を作ろう	理科実験 バスボムを作ろう
12:30	昼食	
13:40	宿題タイム (保護者情報交換会)(担当教員情報交換会)	
14:20	終わりの会	

### (ア) 運動プログラム

Aグループはビーンボウリング、Bグループはサウンドテーブルテニス（STT）を実施し、視覚のみに頼らず楽しめるスポーツを計画した。

#### a ビーンボウリング

ビーンボウリングは、あらかじめ固定してあるピンをめぐらしてボールを転がし、ピンを回転させて得点とするゲームである。児童の実態にあわせ、転がす距離を変えたり、シューターを使ったりした。始めは緊張していた児童も、次第に投球に力が入り、ねらいを定める様子が見られた。手作りのメダルをもらい、笑顔を見せてい

た。

#### b サウンドテーブルテニス（STT）

1部屋に1台ずつ台を配置した。教師と短時間ラリーの練習をした後、トーナメント形式で試合を行った。毎年参加している児童は、このSTTを楽しみにしている児童も多く、「勝ちたい」と口にしていて、次第にラリーが続くようになり、児童生徒も集中し、熱戦となった。保護者も児童生徒の様子に一喜一憂しながら応援していた。

#### (イ) 工作・理科実験プログラム

工作・理科実験では、児童生徒ができるだけ触覚や聴覚を活用して確かめられる内容を取り入れるようにした。児童生徒が主体的に道具を使いやすいようにかごに整理して準備したり（写真1）、見やすく、触って分かりやすくモデルを提示したりすることを意識して、計画するようにした。

#### a 糸電話・ばね電話作り

糸以外のもので作っても声が聞こえるか予想して、確かめたり、糸電話、ばね電話を作成したりした。材料を整理して、かごに入れ、できるだけ自分たちで作業を進められるようにした。1時間目で打ち解けていた児童たちは、友達や本校の職員とやりとりをする様子が見られた。最後にばね電話を作成した。何度も声を出して響く音を楽しみ、保護者にも「見て見て！」と自慢げに見せていた。

#### b バスボム作り

反応を触って確認することが分かりやすいことや、自分で作る楽しみがあることから、バスボム作りに取り組んだ。重曹とクエン酸と水を混ぜて、気体が発生することを、直接触ったり、風船を使って膨らませたりして確かめた（写真2）。参観を通して、保護者や、担任の先生に、視覚障がいへの配慮について、学習環境や支援方法、それを使って活動する児童生徒の様子を見てもらうことができた。バスボム作りでは、アロマオイルを混ぜて、自分の好きな香りがするバスボムを作り、持ち帰っていた。



写真1：一人分ずつかごに準備した実験道具



写真2：気体の発生を風船を触って確かめている様子

#### (ウ) 保護者情報交換会

一人ずつ自己紹介をして、お子さんの現在の様子について話した。話題は、眼鏡の話や、宿泊を伴う校外学習、外食の話題等が中心であった。修学旅行の話では、朝食のバイキングが難しいという話を聞いて、低学年の児童の保護者も、「そういえば」と共感し、経験させることが必要だという話になった。それぞれに積極的に話をする事ができた。

#### (エ) 担当者情報交換会

保護者情報交換会と並行して、別の教室で担当教員の情報交換会を実施した。3名の教員が参加した。本日のサマースクールの感想を話したり、担当している児童生徒や学校のことについて情報交換を行った。拡大教科書や、PDF 版拡大図書、定規や裁縫道具などの教材等を見せ、情報提供を行った。

教員同士が会おうきっかけとはなかったものの、時間が少なく、質問に答えるのみになってしまい、弱視の児童生徒への基本的な対応を十分に伝えることの難しさを感じた。また、この年までの情報交換会は、サマースクールの一部としての実施であり、担当している児童生徒が参加しない場合、担当の先生は参加しにくく、毎年参加人数も少ないということも、課題であった。

#### エ アンケートより

資料1は、児童生徒、保護者、担任、本校職員にとったアンケートに記入されたものまとめである。

#### 資料1： 令和元年度サマースクールアンケート

児童生徒
<ul style="list-style-type: none"><li>・おもしろかったです。たのしかったです。またさんかしたいです、ボウリングがたのしかったです。またあそびたいです。</li><li>・ピンボウリングで73点をとって、金メダルだったのがうれしかったです。バネでんわを作ったのがたのしかったです。</li><li>・バネ電話を作ったり、毛糸を使って電話を作るのが楽しかった。ピンボウリングは、2位だったけど、1回ストライクをとれたからうれしかったです。またしたいです。</li><li>・最初のSTTでは、去年より勝って、3位になれたのでよかったです。次のバスボムづくりでは、日常生活にも使えることを教えてもらったので、いろいろ試していきたいです。</li><li>・昼休みに、テーブルテニスをして、負けたけど、楽しかったです。(※)</li><li>・楽しかったことは、昼休みに遊んだピンボウリングです。(※) ストライクを出せたのでよかったです。ばね電話で話して、おもしろかったです。</li></ul>
保護者
<ul style="list-style-type: none"><li>・普段あまり弱視の子どもたちやお母さんたちと会えることが少ないので、とてもよかったです。子供もたのしく過ごせました。</li><li>・(理科実験)自分で最後まで作り上げ、お友達と交流できて楽しそうでした。ゲームや実験が自分に合ったペースで進んで、無理なく参加できるので、本人がとても楽しみにしています。また来年もぜひ参加したいと思います。</li><li>・子供が工作で楽しそうにしていたので、とてもうれしかったです。また、お母さん方との話では、知らない眼鏡屋さんの名前も出て、別のお店も検討してみようと思いました。普段肢体不自由の学校に通っているので、視覚に問題を抱えたお母さん方とお話できるのはとても貴重だと感じました。</li></ul>

<ul style="list-style-type: none"> <li>• 目にかかわることでの意見交換の場はなかなかなかったので、とても勉強になりました。</li> <li>• 参加者の皆さんが楽しくしていたのがうれしく思いました。お友達と対決する姿を見て、本来の子供らしさが久しぶりに見えました。保護者の方とも色々話せたのでよかったです。またサウンドテーブルテニスがしたいそうです。来年も実験がしたいそうです。ありがとうございました。</li> </ul>
<p>担任の先生</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 白い紙皿の中に黒い紙を貼りつけて白いものを見やすいようにしていたところが印象に残りました。情報交換会では、支援の仕方について様々な意見を聞くことができたのでよかったです。</li> <li>• 話を聞いていただいたこと、他の先生方の悩みや考えが聞けたこと、支援学校の先生方からアドバイスを受けたことがよかったです。先生方の声の調子や、準備物等、場の雰囲気がとても楽しかったことや、分かりやすい（見やすい）掲示物だったこと、とても参考になりました。ほかの保護者の方ともお話ができたことはとてもよかったです。</li> <li>• 普通の卓球でなく、音を使ったものを初めて知ったので、いいなと思いました。情報交換会も、他の先生方と色々な話を共有できて、とても勉強になりました。子供が生き生きと活動する様子が見れたので、本当によい時間でした。どんな支援が有効なのか、支援学校の先生方の様子を見たり、話を聞いたりしたので、これからの学校生活で実践してみたいなと思います。</li> </ul>
<p>本校職員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 前半に体を動かしてから、午後の理科実験という流れがよかったですと思います。「バネ電話作り」は参加した全員が楽しんで、活動できていました。</li> <li>• 夏休みもしばらくしてからなので、他の業務も重なりましたが、時間をとって準備することができました。参加した子どもたちは、楽しく活動できたと思います。</li> <li>• 子供たちが楽しめていたので、よかったですと思います。内容を考える先生は大変だったと思いますが実態に合わせて、一人ひとりに支援しながら、集団での学びができていたように感じました。</li> </ul>

児童生徒のアンケートには、運動や理科実験が楽しかったことが書かれており、児童が視覚に配慮された体験活動によって、満足感を得られたと考えられる。また前ページの「※昼休みに・・・」と記されている通り、休み時間にもSTTやビーンボウリングを自発的に誘い合って楽しんだことが書かれており、子ども同士の自然な交流を促すこともできた。教師が間に入らなくても、自然に児童生徒が声を掛け合って児童生徒にとって印象に残る活動となっていた。

保護者のアンケートからは、「弱視の子どもたちや保護者の方と出会うことが少ないので、話すことができてよかった」「子供たちが楽しそうに活動していたことがよかった」という意見が複数見られた。アンケートからは、子どもたちが普段の環境では、「自分で最後まで作り上げる」「自分のペースで進められる」「運動で対等に戦える」ことが難しい場面もあることが感じられた。視覚に配慮した活動の具体的な工夫や、よさを感じてもらえる機会にすることができた。

職員のアンケートには、次年度への改善点（場所や、動線、準備物）に関することに加えて、子どもたちが楽しめていたことへの記述がみられ、運営者の一員としてやりがいを感じていると考えられた。

従来サマースクールでは、「児童生徒が視覚に配慮された体験活動を通して、満足感を得ること」「視覚に障がいのある児童生徒同士が自然に交流する」「保護者同士が出会い、意見交換をする」「校内の職員の教育相談への理解の促進を促す」ことができていた。

担当者情報交換会については、具体的な支援の例を見てもらったり、それについて話すことができたものの、時間が短く、視覚障がいをもつ児童生徒への対応についての情報提供としては不十分であった。参加できる担当者が少ないことも課題であった。

### (3) コロナ禍（令和3年度、4年度）のサマースクール

令和3年度、4年度は、感染症対策を講じ、対面実施する計画を立てた。対面で実施する準備を進めていたが、両年とも直前に新型コロナウイルス感染症の急拡大があり、対面で実施することはできなかった。運動は難しいため、各グループで実施する予定であった理科実験を、オンラインで実施する方法をとった。児童が見たり触ったりして観察し、面白さを感じ取れる題材を選び、方法を検討した。

#### ア 参加者

令和3年度、令和4年度ともに、対面で参加予定していた期間に8名の申し込みがあった。オンラインへの変更を決定後、メールで参加の意思を確認した。希望したのは3名であった。参加者が3名であり、参加者の都合をあわせることが可能だったため、1日に集約して実施した。事前に、実験に必要な材料とワークシートを郵送して、Zoomを使って、工作・理科実験を行った。

#### イ 職員の運営体制

オンラインに変更したため、支援課の職員のみで対応することとした。

#### ウ 当日の活動内容

表2は、令和3年度、4年度のオンラインで実施したサマースクールの日程である。

表2：オンラインサマースクール日程

時間	活動内容
10:00～10:30	自己紹介、理科実験①
10:30～10:40	休憩（10分）
10:40～11:20	理科実験②
11:20～11:30	感想発表

参加者は、令和3年度は、小学1年1名、小学3年2名の計3名、令和4年度は、小学1年、2年、5年1名ずつ、計3名であった。低学年で対面実施予定だったものを理科実験①、高学年・中学生グループで実施予定だったものを理科実験②として、実施した。家庭でもやりやすいように、また、児童の発達段階を考えて、内容を一部変更したり、作業量を調整したりした。リハーサルを実施し、話す教師をアップにするところ、参加児童をアップにするところ、スライドを示してイラストや文字で説明するところ、手元をアップにするところ、手元をアップにしつつフリップを使って文字情報を加えるところなど、児童にとって分かりやすくするにはどうしたらよいかを話し合っ、準備をした。（次ページ 写真3、4）



写真3：背景を工夫しながら教材を見せている様子

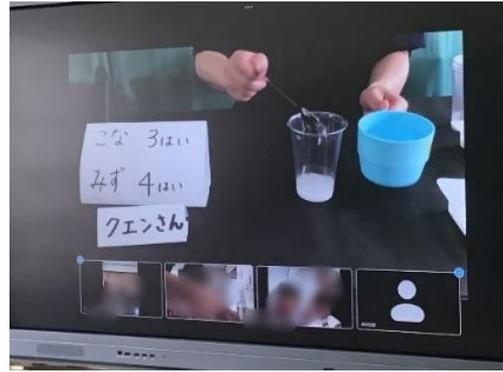


写真4：手元と同時に文字情報を提示している様子

(ア) 令和3年度の工作・理科実験

a 理科実験① びっくり箱（ゴムを使ったおもちゃ）

対面で実施するときは牛乳パックから切る予定であったが、作業時間や保護者の負担も考えて、あらかじめ輪切りにしておいたものを郵送した。全員が完成したところで、掛け声に合わせて全員でびっくり箱を開ける活動を行い、少しでも一体感を感じられるようにした。

b 理科② 浮力の実験

実験②の浮力の実験では、児童が、家庭で準備した野菜が夢中になって浮かぶか調べる様子が見られた。家庭の野菜を使うことで、オンラインならではの生活と結びついた活動となった。学校からは、大きなかぼちゃを水槽に浮かぶ様子（写真5）を見せると、歓声があがった。

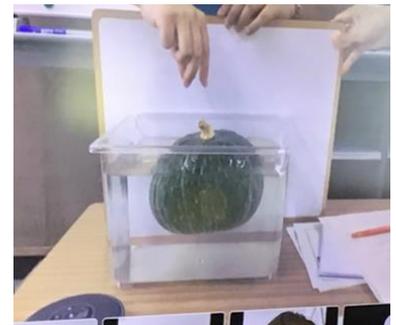


写真5：かぼちゃが浮かんでいる様子

(イ) 令和4年度の工作・理科実験

a 理科実験①「磁石で遊ぼう・砂鉄ユニボトル作り」

クリップを長くつなげたり、砂鉄と磁石を使ってウニのような形を作ったりする活動を行った。クリップを長くつなげられた数でゲームをすると、制限時間内に慎重につなげる様子が見られた。児童同士が直接話すことは難しかったが、画面に注目して、他の児童の様子を見ていた。磁石を使って、砂鉄を移動させたり、ウニの形を作ったりする活動でも、画面に注目し、活動を理解して主体的に進めることができていた。

b 理科実験②「瞬間冷却パックを作ろう」

尿素、クエン酸、その他家庭にある砂糖や塩等と水を混ぜて、温度が一番下がるものを調べた。尿素に水を加えると急激に温度が下がることを確かめた後、尿素と水袋を作って、瞬間冷却パックを作った。学校からは、音声温度計を使って、数値で変化を伝え、確かめた。児童は、「冷たい！」と声を出して驚いていた。

## エ アンケートより

資料2は保護者のアンケートの回答である。

### 資料2：令和3・4年度サマースクール保護者アンケート

令和3年度
<ul style="list-style-type: none"><li>・子供も楽しかったみたいで飽きもしないで、集中していました。唯一、ハサミに時間が掛かりましたが、牛乳パックは切りにくいと分かった様です。親子共々楽しかったです。また参加したいです！</li><li>・(子どもがオンライン授業後、ワークブック裏に書いていた感想文です) 実験で不思議だなと思った事は普通のミニトマトは沈むのに凍らせたミニトマトは浮かぶと言うことです。(後で検索します) 実験や工作で楽しかったことや面白かった事はビックリ箱作りをした事です。作るのも楽しかったけど開けるのも楽しかったです。</li><li>・とても楽しんでました！ありがとうございました。うちのタブレットの問題かもしれないんですが、音声が少し聞こえにくかったです。また教育相談お願いしたいと思ってるので二期が始まったらお電話させてもらいます。</li></ul>
令和4年度
<ul style="list-style-type: none"><li>・楽しかったと言っていました。音が途切れて聞き取りにくいところがありました。</li><li>・磁石を砂鉄を使って遊ぶ事が新鮮だった様です！尿素的冷たさに親子でビックリしました</li></ul>

児童も、学校等での使用経験があるようで、オンラインでの活動に慣れており、保護者やきょうだいと一緒に画面を見ながら説明を聞いて、作業を進めたり、できたことを伝えたりすることができていた。体験活動を楽しむことができており、児童が満足感を得られる活動を提供することができた。しかし、活動の中ではゲーム形式にしたり、見せ合ったりする等、友達に注目する場面を作ったものの、子ども同士で交流するということまでには至らなかった。また、体験活動中には、保護者の支援が必要な場面も多く、家庭への負担も課題である。親子で楽しめたという声もあった。保護者同士の交流につなげることは難しかった。

令和3年度は、このオンラインサマースクールへの参加によって、しばらく教育相談を休止していた児童が、再開するきっかけとなった。

#### (4) 視覚障がい教育担当教員情報交換会

令和元年度の反省を踏まえ、令和2年度から、担任の先生方対象の視覚障がい教育担当教員情報交換会をサマースクールとは切り離して、オンラインで実施した。

オンラインの情報交換では、全体が1時間30分の予定のうち、45分程度本校の教育相談や、視覚障がいへの対応の基本等を説明する時間をとっている。後半は、申し込み時に出していただいた質問について、参加者で話し合ったり、もっと詳しく説明してほしいと希望があった内容について説明したりした。アンケートでは、「基本的な配慮からわかっていなかったのが、色やコントラスト話など勉強になることがたくさんありました。」  
「単眼鏡の練習の仕方、板書の仕方等具体的に分かって指導に生かしたいと思います。漢字の教材やビジョントレーニングの教材も生かしていきたいと思いました。」等の声があ

り、視覚障がいに関する研修へのニーズの高さを感じ、従来よりも充実した情報提供を行えたと考える。

また、「見え方の違いやわかりやすい支援について、一度お話を聞きに行かせて頂きたいと思います。」と、本校の教育に関心をもつ声もあった。学校公開期間等に、在籍校の先生が来校されることが増えている。

### 3 まとめ

#### (1) 成果

##### ア コロナ禍前（令和元年度まで）のサマースクール

- ・コロナ禍前のサマースクールでは、視覚に障がいのある児童生徒同士が、共に遊び、共に学ぶ機会を作ることができていた。運動を日程の前半に行うことで、より打ち解けることができた。今後も視覚に障がいがある児童生徒の自然な交流を促す活動を取り入れていきたい。
- ・児童生徒と保護者にとって、対面でのサマースクールが、視覚障がいのある友達や親子と会う貴重な機会となっていた。
- ・全職員で対応することで、参加者に学校の雰囲気をもっと身近に感じてもらうことができた。また職員にとっても一部の担当者の取組ではなく、視覚特別支援学校の役割について理解を深める機会でもあった。

##### イ コロナ禍のサマースクール・担当者情報交換会

- ・担当教員の情報交換会を、サマースクールと切り離したことで、情報提供、情報交換に特化して、担当教員のニーズに応えることができるようになった。サマースクールが対面で実施できるようになって、見学が可能になっても、この情報交換会はサマースクールとは別に実施した方が充実した支援の内容を伝えることができる。
- ・オンラインのサマースクールでも、児童の満足感を得られる体験活動ができた。家庭でリラックスして楽しむことができた児童もいる。
- ・オンラインサマースクールの実施で、教育相談を再開した人がいる等つながりを継続する一助となった。

#### (2) 今後の課題

- ・オンラインでサマースクールを実施することができたが、子ども同士の自然な交流を促すことが難しい。児童生徒同士が協力しあったり、お互いの補助具を使っている様子を見たりすることができるように対面で実施することが望ましい。オンラインでは、参加できる人が限定されることも課題である。
- ・児童生徒が毎年楽しみにできるような変化のある活動内容を継続して、提供していくことが課題である。職員にとって、視覚に配慮した体験活動の工夫についての専門性を維持していくことが課題である。
- ・これまでほとんど実施できていないが、本校在籍の児童生徒と教育相談利用の児童生徒との交流がもてるような新しい形も検討していきたい。
- ・普段教育相談に関わることがない支援課以外の職員にも、サマースクール及び他の方法で、教育相談利用の児童生徒と関わる機会を維持し、視覚特別支援学校のセンター的機能について理解を深めることが課題である。

#### 4 引用文献

1) 視覚障害教育研究者一同 代表 池谷尚剛 (2010)

「すべての視覚障害児の学びを支える視覚障害教育の在り方に関する提言—視覚障害固有の教育ニーズと低発生障害に応じた新しい教育システムの創造に向けて—」